

この世界には三種類の人間が存在する。ㇿとㇾとㇼだ。

ピジョンの母親はㇼの娼婦だった。

母は父親の異なる子供を2人産んだ。先に生まれたのがピジョン、二年後に生まれたのがスワローだ。しかし母親のㇼの体質を受け継いだのはピジョンだけだった。

ピジョンが身体の変化に気付いたのは15歳の頃だ。その頃初めてのヒートが訪れた。

発情期はㇼにとって避けて通れない症状だ。

この期間にさしかかったㇼは日常生活に障りをきたすほどの脱力感と倦怠感に苛まれ、不可抗力のフェロモンでㇿやㇾを誘惑する。

『母さん顔赤いよ、大丈夫』

『大丈夫よピジョン。心配してくれるの、優しい子ね』

『辛いなら休んで方が……』

『いいのよ、仕事してたほうが火照りがまぎれるわ。表に待たせてるお客さんを呼んできて』

母はスラム街のトレーラーハウスで客をとっていた。

セックスの技巧と美貌で人気を博した母のもとにはㇾやㇿの男女が日々詰めかけ倒錯した情事に溺れた。

若く美しい母は、けれど番を作らなかつた。

その理由を息子たちが問うたびイタズラっぽく微笑んで、2人を抱き寄せてこう言うのだ。

『ママのいちばんはアナタたちだから』

ㇼが発情期の宿命から逃れるにはㇿと番になるしかない。されど息子たちを心より愛する母はパートナーに関心を移すのを是とせず、蒸発する前日までピジョンとスワローを想っていた。

『だれか1人に縛られるのは嫌なの、全ての不幸を生まれのせいにして運命に服従するのめね。それより沢山のひと気持ちいいこと愉しみたいわ』

母は天性の娼婦だった。娼婦は彼女の天職だった。彼女は人生を楽しんで愉しみ尽くして、そうしてピジョンとスワローの前から消えた。

母が消えたあと、ピジョンは母の知人であるダウンタウンの神父に引き取られた。

神父はピジョンの良き理解者にして後見人であり、将来は児童福祉の道に進みたいというピジョンの夢を応援し、カ

レッジの学費まで出してくれた。

黄色いタクシーが道路を駆け抜け、信号がかまびすしく点滅する猥雑な街並み。コンクリ壁を埋め尽くすグラフィティを巨大な書割に見立て、スケボーに乗ったティーンエイジャーが宙がえりをきめる。

大学の構内を出た足でダウンタウンを歩きながら、ピジョンは心理学の本を読んでいた。大学の図書館で借りた本だ。レポート提出の期日が迫っているのもあり、勉強には一層熱が入る。

「思春期の準備段階として児童期後半を移行期と称する。また9歳から11歳にかけてを仲間意識を身に付けるギヤングエイジ、運動神経を伸ばすゴールデンエイジと称す……へえ、面白いなあ。確かにあの年頃の悪ガキはギヤングみたいなイタズラするよね」

分厚い専門書のページをめくり、行間の密な記述に感心する。次いで思い出すのは弟の記憶だ。

「スワローにも手を焼かされたっけ」

いや、現在進行形か。

反抗期の弟の悪辣さを回想し、苦笑いで独りごちる。

走行車の排気ガスが路上のごみを吹き散らし、ピンクゴー

ルドの繊細な髪をなでゆく。

「おっと、」

めくれたページを押さえると同時、ピジョンの足元に何かが当たる。バスケットボールだ。ふと見上げればコンクリ打ち放しのバスケットコートで、カジュアルな服装の悪ガキたちがゲームに熱中している。

「とつてー」

金網で区切られた向こう側、オーバーサイズのトレーナーを着た少年に両手で催促され、ピジョンは「OK」と気さくにこたえる。栗を挟んで本を閉じ、それをご丁寧にリュックにしまってから両手でボールを抱えてトスする。

この位置からバスケットボールまではかなりの距離があるが、もし一発でシュートがきまったらカッコいい。

そんな出来心が芽生えてボールを投げた結果、長大な放物線を描いて金網をとびこえ……られず、がしやんとど真ん中に当たる。

「惜しい、失敗」

転々とはねて戻ってきたボールに頭をかく。ピジョンの間抜けさにコートに散らばった少年たちはドツと沸き、それに怒るでもなくお人好しな苦笑いを浮かべ、今度は無理せず金網の手前まで行ってボールを渡す。

「どうぞ」

「サンキュ」

試合が再開し、少年たちがボールを追って走り出すのを微笑ましく見守る。

その時だ。

「ッ……!？」

『アレ』がきた。

心臓が強く鼓動を打ち、全身の毛穴が開いて汗が噴き出す。この感覚は覚えがある……発情期だ。

「嘘だろだってまだ……」

急激な虚脱感によるめき金網に凭れる。

網目に手を食いこませ不安定に前傾、節操なく上擦る吐息と唾液を飲み干す。

抑制剤を忘れた自分の迂闊さを呪っても後の祭り、とにかく少しでも人けがない場所へ逃れようと歩み出す。

誰にも知られたくない、見られたくない。

肩を滑ったりユックが路地の入口にどざりと落ちる。

それを拾い直す気力もなく建物と建物の峡谷に迷い込み、荒廃した路地の暗がりを感じない足取りで歩いていく。

「はあ……はあ……」

身体が熱っぽい。肌がおそろしく敏感になっている。

独りで歩くのも辛いのに教会まで帰れるだろうか。ズボンのポケットに突っこんだスマホを手に取り、短縮で登録した番号を呼び出しかけ、葛藤に顔を歪める。

やっぱりだめだ、先生に迷惑をかけられない。子供でもあるまいし、むかえにきてくれなんて頼めるわけがない。

発情がおさまるまで耐えるしかないのか。ダストボックスとゴミ袋の山の隙間で膝を抱え、キツく目を閉じる。

異常に喉が渇く。目が潤んで視界が霞む。股間がズキズキ痛いほど脈打って後ろの孔が疼く。

どうか誰も通りませんように、気付きませんように。

焦燥にまみれた心中で狂おしく祈り、手の甲を噛んでむらむらをごまかす。

「んうッ、んッむう」

自分の体が思い通りにならない恐怖ともどかしさ、それらを上回る性欲がビジョンを揉みくちやにして思考をひっかきまわす。

「つぶ……」

瞼裏の暗闇に朧げに浮かぶ母の面影に縋る。

母も同じ苦痛を味わっていたのか。

ビジョンが覚えている母は若く美しく優しく、発情期でも息子たちの前では気丈に振る舞っていた。

俺は母さんみたいに強くない。あの人ほど強くなれない。

寂しい、会いたい。今どこにいるんだ、母さんならきつとわかってくれるのに……

「お金なんてもつてないよ」

ピジョンの切実な願望を遮ったのは、突如として路地に響いた悲鳴。

スケボーを脇に抱えた男の子が鉄パイプを担いだ不良の集団に首ねつこを掴まれている。

「強盗扱いたア失礼だな、そっちがぶつかってきたんだろ」

「わ、わざとじゃないよ！ 道広がつて歩いてるから……」

「だとさ。聞いたかお前ら、テメエのしたこと棚に上げて開き直るたあふてぶてしいガキだぜ」

「クリーニング代に慰謝料上乘せだなこりや」

「やめて痛いやめてよごめんなさい謝るから！」

ストリートファッションをゴツイチェーンで飾り立てた連中が、哀れにもすっかかり縮み上がった男の子を小突き回して恐喝する。

「ごめんなさい、許して！」

あどけない顔を悲痛に歪め、ベそをかいて謝罪する男の子。ダストボックスとゴミ山の隙間にちよこんとはまり込んだピジョンは彼らの死角に入るせいか、まるで眼中にない。このまま黙っていればやり過ぎせる。その方がいい。

軟弱で喧嘩に勝った試しのない俺が余計な口出したってこ

じれるだけで、コイツらだって命まではとらないはず……

「ひっ！」

鉄パイプの先端が風切る唸りを上げて男の子を掠めると同時、ピジョンは口を開く。

「よせ、よ」

「あん？」

集団のリーダー格がこちらを向く。

「ンだてめエ……どつから沸いた」

「さつきからずつといたよ……その子から離れる、警察呼ぶぞ」

ダストボックスに寄りかかって立ち上がり、孤立した子供に目配せ。

「今のうちに」

男の子が眼差しに感謝と安堵をたたえ頷く。

腰碎けに逃げていく男の子を庇って不良の眼前に立ち塞がったピジョンに、リーダー格が舌なめずりをする。

「この感じ……☒か」

「フェロモンだだ漏れじゃん」

「犯してくださいって言ってるようなもんだ」

こうなることはわかってた。

わかってはいたけど、それは他人を見殺しにする理由にならない。今そこにいる子供の泣き声に耳を塞いで保身に走る

言い訳にならない。

唇を噛んで虚勢を張るビジョンへと、凶器を携えた不良たちがごぞつてにじり寄る。

「慰謝料とりっぱぐれた分も遊んでくれるんだよな、お嬢ちゃん」

「股関節ぶつ壊れるまでマワしてやつから」

「寄るな、叫ぶぞ」

深呼吸で実行しようとするもリーダーが動く方が早い。

「うぐつ、がほ！」

鳩尾に衝撃が炸裂、酸っぱい胃液と唾液をぶちまけるビジョン。

続いて不良たちに蹴りを浴びせられ、靴でもつて無造作に転がされる。

リーダーが横柄に顎をしゃくり、手下がビジョンの両手をおさえこむ。

「肉便器がカッコつけんじゃねえ」

「誰でもいいから啞えこみたくてうろついていた淫乱が」

「優しい俺たちとばつたり出会えてよかったじゃん」

「ケツの奥の子袋にたんまりザーメンくれてやるから覚悟しな」

不良たちは既にビジョンが垂れ流すフェロモンに理性を失っている。

分厚い掌で口を塞がれたら抵抗する術もない。

脳裏を駆け巡る大事な人たちの顔、母に神父に弟たちの顔……無力感と屈辱感のごった煮で塩辛い涙がこみあげる。

ビジョンのシャツを剥いで胸板を暴いたリーダーが下卑た高笑いをする。

「よそのガキの為に一肌脱いでむぎむぎやられちゃ世話ねえな」

「俺の目に入ること、かはつ、無関係なことがあるもんか」

こんなヤツらにやられるのは嫌だ。せめて感じないように、何をされても感じたりしないようにギョツと目を瞑る。リーダーの手がビジョンのズボンに伸び下着ごと引きずり下ろす。

先走りの汁に塗れたペニスこそりたち、かと思えば強引に脚が割り開かれ、分泌液で潤んだ窄まりに怒張が添えられる。

「勝手にケツが濡れんだから×つてのは便利な身体だな」

「性欲処理の為に生まれてきたようなもんだ」

「待て、待」

「誰が一番に孕ますか賭けるか？」

母さん。先生。スワロー。

「ん————ッ、うう————」

ずぶりと圧がかかり、赤黒い怒張の先端が窄まりにほんの僅かめりこむ。

口を塞がれたせいでろくに息もできず暴れて抵抗するほどに酸欠で顔を染め、目尻からこめかみへ、こめかみから耳孔へ垂直に吸い込まれる涙のぬるさに戦慄く。

心は拒んでも身体は悦んでいる、先走りに濡れそぼり屹立するペニスと男を迎え入れる準備ができた後孔がその証拠だ。

「喘げよ」

リーダーが一気に根元まで挿入しようとしたその時――
バスケットボールが後頭部を直撃する。